

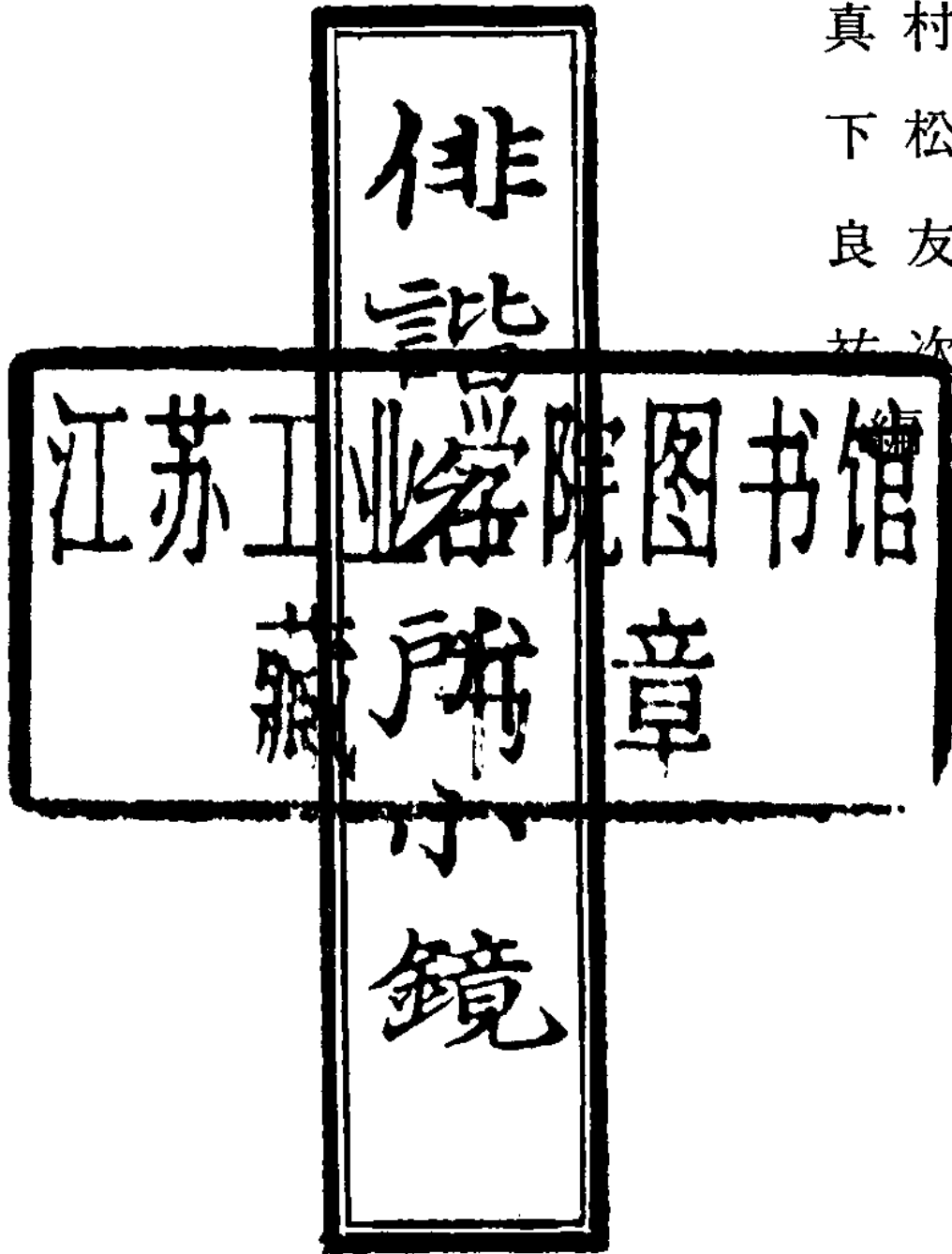
村松友次編
真下良祐

俳諧名所小鏡

下

古典文庫

真村
下松
良友
林次



下

俳諧名所小鏡

中
卷
下

俳諧名所小鏡

中卷下

蝶夢編

信濃

二九四 更級山 さらしなや田毎の星の化こゝろ

二九六 更科や馬の恩しる秋の月

二九七 月夜よし田ことの数を小さかつき

二九八 さらしなの月にとふ啼ほとゝきす

二九九 更級や目さむる夏の月にさへ

三〇〇 十日路のてんほや月の晴くもり

三〇一 月の雲鳥のなくは何郡

木因

言水

如泉

支考

鞭石

晩山

万子

二九五二

雨の月余国のくまのなきよりも

友元

二九五三

雲に乗るわれか田毎の月の照

露川

二九五四

鎌入るゝ田毎の昼のひかり哉

木兒

二九五五

姨捨山^{トモ}

おもかけや姥ひとりなく月の前

芭蕉

二九五六

姨棄や子捨は得來し月の前

魯町

二九五七

とう見たら姨すて山の月を月

三千風

二九五八

おは捨や曇るといふは花の事

涼菟

二九五九

名月やおは捨くもる一おもひ

言水

二九六〇

月の鐘姨すてにあらすさましや

才麿

二九六一

姨捨やせめては秋の日の光り

柳居

二九六二

見へらして戻るな月は姥か友

倚彦

二九三

伯母捨やうちかたふいて月ひとつ

涼袋

二九四

おは捨てまた連て来て後の月

也有

二九五

夏の月たゝ短夜そ泣れける

梨一

二九六

捨てなき我なれハこそ月今宵

浮流

二九七

すてられはかゝる山辺そけふの月

香風

二九八

よしやいま姨すつるとも春の山

蝶夢

二九九

姨捨てすてられにけり昼の月

越後 菊文

三〇〇

おは捨て哀わするゝ月の出端

下総 立砂

三〇一

姨棄や月更て我か影法師

石牙

三〇二

おはすてや月を昔の掛かゝみ

昨烏

三〇三

姥石

伯母石の肌すさましやけふの月

方山

二九七四

おは捨や嗚呼石となり月となり

麻父

二九七五

夏山に見えてわひしや石ひとつ

桐雨

二九七六

姨捨や石にすかりてきりくす

羊夫

二九七七

待宵やまた捨られぬ石ひとつ

馬瓢

二九七八

更級川

それこゝにさらしな川や蕎麦の花

その

二九七九

月にさらす更科川の石白し

加賀紫狐

二九八〇

いさよひや更級川を小くらかり

杜音

二九八一

有明山

十六夜はあり明山のはしめ哉

作者不知

二九八二

明月や有明山へ明からす

遠江文波

二九八三

片われや有あけやまに霞む影

睡花

二九八四

鏡台山

月影や麓の小田の水かゝミ

作者不知

二九八五

山姫のかけて見せるやけふの月

柳几

二九八六

山の端や片われ月のすはりかね

波鷗

二九八七

筑摩河

ちくま河春ゆく水や鮫の髓

其角

二九八八

種ひたし春の千曲をまた濁し

鶏山

二九八九

笄渡

さして行舟に一もと花すゝき

上野一紅

二九九〇

乗合や草かる人は女郎花

和青

二九九一

河中島

一備へあれにも山のさくら哉

涼菟

二九九二

今は水を田に入るゝ車掛りかな

作者不知

二九九三

穂すゝきや唐の頭の今とても

木兎

二九九四

善光寺

善光る寺て月見る今宵哉

宗祇

二九九五

月影や四門四宗もたゝひとつ

芭蕉

二九六

遠からぬこの極楽やほとゝきす

支考

二九七

冬かれて臼も撞木も残けり

涼菟

二九八

夢かとよ笙歌はるかに練雲雀

雲鼓

二九九

むく起のこゝろ涼しや堂参り

越後 慈竹

三〇〇

見わたせハ蓮台ひろき花野哉

露川

三〇一

参らねハならぬ国なり寒くても

曾木

三〇二

朝顔やミな同音に口をあく

柳居

三〇三

山も眠りさますや堂の朝御帳

盧元

三〇四

ゆふかほの窓にもかりの臼座哉

当寺 元水

三〇五

我こゝろ七重の外霞かな

麻父

三〇六

明かたや一時に蚊のむせふ声

蝶夢

三〇七

菜の花の色やはとけの御国とも

梅珠

三〇八

戸隠山

かうくし戸隠の花松ひの木

涼菟

三〇九

後手に神供さくくとや木下闇

好神

三〇〇

戸隠や葉かくしの山や今朝の雪

桃路

三〇一

有かたやそつと寒さも後から

惟山

三〇二

岐蘇

檜香や木曾の境の冬こもり

許六

三〇四

山吹も巴も出て田植かな

同

三〇五

見下しつ見上つ木曾の夏木立

涼菟

三〇五

膝かしらつめたき岐蘇の寐覚哉

鬼貫

三〇六

木曾の人落葉くさよ冬籠り

瓠界

三〇七

燕は土て家する木曾路哉

猿雖

三〇八

木曾はまた花も咲なり夏大根

支考

三〇九

蚊帳つらぬ枕に岐岨の嵐かな

厚為

三〇〇

卯の花や木曾の泊りのまた寒し

兎士

三〇一

家ことに祖父ある菊の山路哉

蓼太

三〇三

夏木立いとゝ木曾路の空せまし

蝶夢

三〇三

河

木曾川の材に待えたり五月雨

山川

三〇四

流れ木や簀のうへのほとゝきす

丈草

三〇五

夏川の音に宿かる岐岨路哉

重五

御坂

三〇六

蘭原

その原や木賊を登るかたつふり

燕説

三〇七

園原に人にも逢す冬木たち

一紅

三〇二八

帚木につれなき秋の入日かな

近江 一鳥

三〇二九

山かつらありとは見えて風匂ふ

睡花

三〇三〇

棧

棧や命をからむ蔦かつら

芭蕉

三〇三一

かけはしや一方は山ほとゝきす

涼菟

三〇三二

梯の上下なからさくら哉

車庸

三〇三三

霧はれて棧は目もふさかれす

越人

三〇三四

かけはしやあふなけもなき蟬の声

許六

三〇三五

棧のあれはや雲にほとゝきす

支考

三〇三六

かけ橋や蠅も居直る笠の上

鳥醉

三〇三七

かけはしやかよひなれたる鹿の妻

滄洲

三〇三八

三度まで棧こえぬ我いのち

蝶夢

三〇三九

梯や蹄の下をほとゝきす

近江 巨洲

三〇四〇

かけはしや我とならひて蟬もなく

出羽 以童

三〇四一

鳥居嶺

ほとゝきすそなたは鳥居峠あり

涼菟

三〇四二

木の葉ミな真赤い華表峠かな

木兎

三〇四三

雲の嶺またいて鳥居峠かな

雲裡

三〇四四

寐覚床

夏山は寐さめの枕屏風かな

宗因

三〇四五

鶯のねさめや四月五月まで

支考

三〇四六

来てみれハ浮世の夢の寐覚哉

駿河 白隠

三〇四七

駒 嵩

木賊かる日和や雪の駒か岳

美濃 闇如

三〇四八

白雨やすそして晴る駒かたけ

信濃 巴笑

三〇四九

風越峰

風こしの山やふさけて雲の岑

鶏山

三〇五〇

五月なれ風吹こして雨の雲

桐雨

三〇五一

諏訪湖

鴨の巢や富士の上漕すハのうミ

素堂

三〇五二

江の秋や網にこほるゝ富士の雪

信濃 洞芝

三〇五三

明月やあくれは解る諏訪の湖

作者不知

三〇五四

狐より念者とわたる氷かな

栗津 班鳩

三〇五五

しなのなる歳暮車や湖の上

沾涼

三〇五六

諏訪のうミ狐に告よ初こほり

也有

三〇五七

名月や兎のわたるすハのうミ

蕪村

三〇五八

うめ咲やけふより諏訪の廻り道

二柳

三〇五九

富士見んと氷に立やすハの湖

蘭更

三〇六〇

御渡りも過けり湖に鳥の声

梅珠

三〇六一

湖解て富士の白雪影寒し

木姿

三〇六二

湯あかりに氷ありかん諏訪の湖

千影

三〇六三

衣崎

夏の旅衣か崎に富士白し

来之

三〇六四

かく見るも氷らぬうちそ波の不二

蘭更

三〇六五

諏訪社

雪の下にある七草や七不思議

重頼

三〇六六

贅の鹿背に霜ふりし夢やみし

瓦全

三〇六七

御射山

雪国やはらへて穂屋の花薄

陸奥等窮

三〇六八

雪ちるや穂屋のすゝきの刈のこし

芭蕉

三〇六九

刈こみし穂屋やおとろふ虫の声

麦華

三〇七〇

鷹匠の箸にもをらて花すゝき

重厚

三〇七一

御射山やきのふは薄けふは里

蘭更

三〇七二

ほや作る秋なつかしや薄のめ

蝶夢

三〇七三

桔梗原

負て散る簾色もあり雲の峰

涼袋

三〇七四

夏草や桔梗か原も露はかり

丹後 鷺十

三〇七五

首塚をかそへて行や枯野原

淡路 風如

三〇七六

皓月輪

かく月の輪や夏草のミへかくれ

備前 柳和

三〇七七

蜻蛉や輪のりの芝をきれて行

鶏山

三〇七八

切原牧

きりはらや霧も晴ゆく駒の声

雨草

三〇七九

望月牧

しかすかに月毛そ多き牧の秋

作者不知

三〇八〇

浅間山

夕立に焼石すゝし浅間やま

素堂

三〇八一

引明や山はけふりて野らの雪

万子

三〇八二

吹飛す石は浅まの暴風かな

芭蕉